



同窓報

千南原

第5号

昭和54年5月25日発行
編集・発行
藤枝市天王町1丁目7-1
静岡県立藤枝東高等学校
同窓会事務局



順調に進む同窓会基金募集

同窓会長代行 松 永 琢

同窓会の基金として二〇〇万円を目標に寄付金を募集いたしておりますが、皆様にはこの趣旨をご理解いただき格別のご協力を賜わり衷心より感謝申し上げます。

さて、毎年三月の終りになると、学校では先生方の異動が発表され、幾人かの先生をお送りし、新しく何人かの先生が赴任されてくる。公立高校である以上当然のことです。先生が野口前校長先生の後任として校長として赴任され、四月から学校が新しい空気に包まれ、意欲的に生徒の指導にあたられていくのを感じます。

また、母校の生徒についても同じようなことが言えると思えます。三月に三三〇名余りの三年生が卒業し、それぞれの進路へ希望をもつて進み、また同数位の中学生が入学してきます。生徒の総人数は大体変わっていませんが、その内容が年々更新されております。

こうした流れの繰り返しのなかで、今までの東高の変遷をふり返ってみると、私は高校生の教育そのものが如何に重要であるかを今日ほど強く感じています。これからこの時代は私たちの周りには未知の部分が多くなります。増大してきます。そうした時代に備えて高校教育が社会的・経済的・国際的に複雑にからみ合い複合的な関係のもので質的に変化してゆく中で、若い東高の生徒は知力、体力をつけて共に現代人として人間らしい倫理感をそなえ、自ら考え、自分を鍛え、正しく判断する力を養う必要があると痛感いたします。

この頃二十一世紀になると、たぶんヘルギーとか言うような話の話題が多く聞かれます。確かに今の高校生は二十一世紀において活躍する人々でありたい。しかし、私



藤枝東高正面



着任のごあいさつ

三浦 孝一 三 浦 孝 一

このたびの人事異動によりまして、はからずしも本校の校長を命ぜられることとなりました。前任者であられる野口先生は、人格識見とも高邁な大校長であり、そのあとを受け継ぐ事となり本当に身のひきしまる日々であります。

本校は半世紀を越す伝統をもち幾多の有為な人材を輩出しているばかりで、大学進学率もその実績と並んで、スポーツの面でもその名声を馳せていることは、今更申し上げるまでもありません。私も、この三月まで県教育委員会におりました。県下のすべての公立高校を訪れ、また、それぞれの学校についてもおおよそ承知しておりますが、本校は先生方の陣容はもとより、学校の施設・設備等すべての面にわたり、生徒をとりまく教育環境は、県下の最右翼であ

恩師のたより (小宮山先生)



えにし 小宮山 宏
私は剣道が大好きで、卒業当時錦織校長から体操は勿論他に教鞭(二段以上)の出来る人をとの要請があったが、この三条件揃うと云う事になった。自分ではなにかと云うが、その中から選抜されて幸運にもこの藤枝の志太中に赴任することが出来た。

その頃も御多分にもれず就職難時代であったが、その苦勞も知らず就職する事が出来た。これがそもその志太中との縁の初め、それから三十有余年という長い間御世話になったのである。赴任してからの間「兄貴」というニックネームで呼ばれたが、年と共にいつか「親爺」の渾名に変わっていったのである。

「兄貴」「親爺」と呼ばれた当時、純情で活気に満ちた少年達だが、短い期間(五年在学、三年在学)ではあるが、何時までもこの縁を縁としてなつかしく持ち続けている。偶々不馴れな県庁や市役所などへ行った時、思いもよらぬ所から「先生」と呼ばれる時など本当に嬉しく思うのである。時々道であたり、自動車から下りて言葉をかけてくれたりしても、その場で咄

志太中・藤枝東高の伝統

同窓会副会長 橋 本 守

わが母校藤枝東高を語るにはサッカーの歴史を語らなければならぬ。私もサッカー部員であった一人として、その伝統について一言述べてみたいと思う。

大正十二年初代校長の錦織先生が本校創立とともにサッカーを校技と定めて以来、その精神は先輩から後輩へと引き継がれ、今日に至るまで、私の入学する以前、創立から昭和十五年頃までのサッカー部は、すでに数々の優秀な成績を残していた。また昭和十一年には卒業生の松永行雄、笹野積次氏(両氏とも故人)がベルリンオリンピックに出場、我々の誇りとするところであった。

私が志太中に入学したのは昭和十五年、太平洋戦争の直前であった。一年生のうちは全員、放課後蓮華寺池の周りを走り、鍛練させられ、二年生から各部に配属された。当時県下の中高等学校サッカーチームは六つほど、対外試合としては浜松大専主催の大会、甲府静大会、神宮大会であった。戦争が激しくなり、物資が不足、ボールも下級生が修理しては使用、あてこの個所をヘッディングする、頭にも反映、ゴール前に全員集合「戦術」を唱えてから練習。しかしサッカーに対する関心は全校一丸が、その際指導者としての条件は勉強のみならず運動や教養の面を両立させながら、他人以上の苦しみ耐えて努力した経験を持ち、また人の心の痛みを感ぜられる人間でなければならぬと考え、そして眼を広く世界に開いた、そのような生徒に皆様の後輩を育てて行きたいと考えています。

本年三月の大学進学もお陰で然るべき成果をあげ、御期待のサッカー部も連日汗と涙にまみれて精進していただいております。小宮山先生を中心とした同窓会も、一致協力サッカー部復興に努めた。昭和二十七年全国選手権大会の



数々の優勝旗・優勝杯

母校の近況

今年も好調 大学進学状況

今春三月の大学合格者数(延数)は、国立大学一六四名、公立大学二三名、私立大学四九七名で、この数年確実にその数を増しています。とりわけ地元国立大学への志望が一段と強まりました。静岡大学には八三名が合格しました。この数は昨年に続いて全国一位の好成績です。また難関と言われる国立大学医学部にも九名(内女子三名)が合格しております。

本校の生徒にとって、高校生活は「大学受験」を抜きにしては語れないのは事実ですが、反面、決して「受験」だけが高校生活を充たすものではないと、彼等の真の直中にあります。「生きる」ことの意味、「愛することの意味」「学ぶことの意味」を身につけて生徒の一人一人が、よりよい人生のために悩みながらも、勉強に運動に勇敢に立ち向かってゆくよう、たくましい学生の育成に努力いたします。

どうか、先輩の皆様の暖かい一層のご支援と叱咤をお願いします。

同期会だより

九十名も出席(26期生)

藤枝東高第一期生(志太中通算二十六期)の同期会が、四月一日(日)に開催された。

幸い好天に恵まれ、折りから母校で開かれていたサッカーフェスティバルをまず観戦、母校選手健闘を応援、久々にサッカーの街藤枝の雰囲気を感じました。

続いて会場を「大正亭」に移しての懇親会、卒業当時の担任だった藤井・鈴木・新波・加藤・齊藤・池谷の各先生も、一生懸命の担任だった清水先生も出席され一同大感激であった。また同期生も遠くは青森県から、京浜地区からは数名は実在する来藤、八十数名も出席、実に盛大な同期会であった。四十半ば、それぞれの人生を歩んでいる同期生、十六年ぶりの同期会とあって、時の経つのも忘れて懐旧談に花を咲かせ、また今後の健闘と再会を誓って散会。(宮崎順記)